J・コンドルが濃尾地震調査後に行った演説について

STUDY ON THE SPEECH BY J. CONDER AFTER
THE NOBI EARTHQUAKE INVESTIGATION

平山 育男*

Ikuo HIRAYAMA

This article examined two speeches performed by J. Conder after the stricken area investigation of the Nobi earthquake, and following points become clear. One speech was carried out in The speech meeting of the Tokyo Nouben-gakkai (Tokyo Elocutionary Society) at Kinki-kan on December 6, 1891, and the English manuscript was placed in the December 12, 1891 of the Japan Weekly Mail. Conder performed the other speech in the Society of Japan Architect on January 27, 1892, the English manuscript was placed in the January 30, 1892 of the Japan Weekly Mail, and the original English title was “EARTHQUAKE VERSUS BUILDINGS.”

Keywords : *the Nobi earthquake, J. Conder, speech*

濃尾地震, J・コンドル, 演説

1. はじめに

これまで筆者は明治24(1891)年10月28日に発生した濃尾地震の被災地にJ・コンドルが赴き、現地から調査報告をThe Japan Weekly Mail. (以後、JWMと記す)紙に投稿し、署名人X.の名でこれが同紙に掲載されたこと^{注1)}、この投稿とコンドルによる“AN ARCHITECT” S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.”^{注2)} (以下“NOTES”と記す)の内容を分析することにより、コンドルによる濃尾地震被災地における調査地と日程が明らかになることを示した^{注3)}。また、被災地の調査においてコンドルが描いた写生(スケッチ)についても考察を加え、“NOTES”やコンドルのスケッチ・ブックに残るものが何を描いたものであるのか検討を加えた^{注4)}。

ところで、コンドルは調査の翌年となる明治25(1892)年1月27日^{注5)}、造家学会にて濃尾地震被災地における調査を受けた演説^{注6)}を実施した。そしてこの演説の内容から、コンドルは造家学会での演説に先立ち、明治24(1891)年の内に能弁学会においても演説を実施していることが判明する。能弁学会における演説の概要は造家学会主催の演説冒頭で述べられる^{注7)}ものの、詳細は従来明らかとされていない。

一方、造家学会における演説記録もコンドルの演説を滝大吉の翻訳で市東謙吉が速記したものであるが、コンドルの演説を生で示す英文原稿存在の有無は従来明らかとはなっていない。

そこで本稿では濃尾地震後、コンドルにより行われた能弁学会に

おける演説の日時、場所、そして演説の具体的内容等と造家学会における演説について考察を加えることを目的とするものである。

2. J・コンドルによる能弁学会での演説

2-1 J・コンドルによる能弁学会演説の日時と場所

コンドルが実施した能弁学会において行ったとする演説^{注8)}は、後掲する明治24(1891)年12月12日付JWM紙によると

THE EFFECTS OF THE RECENT EARTHQUAKE UPON BUILDINGS.
READ BEFORE THE TOKYO NOBENGAKKAI (TOKYO ELOCUTINARY SOCIETY), DECEMBER 6TH, 1891.

BY PROFESSOR J. CONDER, F. R. I. B. A. ^{注9)}

〔和訳〕最近の地震が建物に及ぼした影響

1891年12月6日 東京能弁学会における演説

英国王立建築家協会正会員 J・コンドル教授による

とされる。即ち、JWM紙によればコンドルは明治24(1891)年12月6日に、「最近の地震が建物に及ぼした影響」としてする演題で東京能弁学会において演説を行ったとする。

ところで、この演説について日本側の新聞では能弁学会の名前は出ないものの、『読売新聞』に

○臨時大演説会 濃尾の震災に付き来る六日正午より神田錦輝館に於て臨時大演説を開き先般災地に赴き種々尽力せられたる医学博士佐藤進氏(順天堂医長)理学博士巨智部忠承(農商務省

* 長岡造形大学造形学部 教授・博士(工学)、博士(造形)

Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

地質調査所技師)建築博士ゼー、コンドル氏(内務省御雇)工学博士田辺朔郎氏(工科大学教授)の四氏が出席して大に災地の実況より細に取調べられたる理學上最も緊要なる演説を為す由^{注10)}とあり、この他に『東京朝日新聞』^{注11)}や『時事新報』^{注12)}にも同様の演説会開催を予告する記事が掲載される。また、『読売新聞』^{注13)}、『東京朝日新聞』^{注14)}、『時事新報』^{注15)}などには後日、別に演説会の開催を知らせる広告の掲載があり、

●臨時演説会

六日午後一時より於
神田錦輝館開会す

耐震築造物如何	工學士田辺朔郎君
地震の結果及今後の注意	理學士巨智部忠承君
建築物と地震の關係	建築博士コンデル君
負傷者現況及今後の治療	醫學博士佐藤進君

とある。そして演説会の様子は『時事新報』に

○地震演説会大会の模様 一昨日神田錦輝館に開きたる同会の模様は傍観者無慮一千余名にして第一田辺工學博士が地震に耐ふべき建築の事第二コンデル建築博士が建築物と地震の關係(通訳者滝工學士)第三巨勢部理學博士が地震の結果等を演じ最後に佐藤醫學博士が震災地に於ける死亡者負傷者の統計を挙げて今後の治療法等を詳説せしと云ふ^{注16)}

とされるように1,000人を超える聴衆が詰め掛けたとする。

演説会の開催について日本側の新聞には能弁学会主催との記載はないが、広告ではコンドルら4人を弁士とする臨時演説会が12月6日午後1時より開催とあるため、この演説会は同日13時から神田錦輝館にて実施されたとすることができる。演説者は田辺朔郎、巨智部忠承、コンドル、佐藤進の4人となる点は日本側の新聞における記事、広告ともに共通する。コンドルの演題はJWM紙で「最近の地震が建物に及ぼした影響」とあるが、日本側の新聞における広告では「建築物と地震の關係」となる。

なお、会場の神田錦輝館は、演説会に先立つ10月9日^{注17)}に貸席等として改装の上で開業し^{注18)}、演説会などにも使用された施設である^{注19)}。

2-2 J・コンドルによる能弁学会演説の原稿

上掲したようにJWM紙におけるコンドルによる演説の記事では、2行目冒頭に“READ”とある。訳では“演説”としたが、これはJWM紙の記事がコンドルによる演説原稿であることを示すものであろう。

なお、後の話となるがコンドルは明治44(1911)年、建築学会において“公共建築に関する私見”と題した演説を行っている^{注20)}が、この際も司会の曾福はコンドルの演説後に“唯今のコンドル君の朗読は”^{注21)}とする点、コンドルが準備した原稿に沿った演説をしたことを示すものである。加えて通訳の高松も

コンドル先生の御話は建築学会の委員の方が御通訳をなさることになつて居りましたが、御差支がございましてお出来にならなくなりましたので、急に私が、代理を勤めますことになりました。《中略》私は先生のオリジナルコツピーを拝借いたしました、之に就て朗読的に述べる積りで御座います^{注22)}。と述べるように、コンドルが準備した原稿の複写を用い、“朗読的に”通訳を行ったことがわかる。

即ち、明治24(1891)年12月6日に実施された演説においてもコンドルは原稿を用意し、後にこれがJWM紙に掲載されたと考えられるのである。

2-3 J・コンドルによる能弁学会演説の内容

コンドルによる演説の概要は既述のように造家学会での演説冒頭部分にまとめられるが、その詳細は従来明らかではない。以下では、JWM紙に記される演説原稿を追いながら内容の考察を行いたい。

演説の内容は大まかには次のようにまとめることができる。

- 1 はじめに
- 2 日本におけるこれからの建築様式
- 3 木造軸建築と地震
- 4 煉瓦造・石造建築と地震
- 5 耐火建築について
- 6 さいごに

以下、各項目について内容を検討したい。

2-3-1 はじめに

コンドルは演説冒頭で次のように述べている。

GENTLEMEN, - I have been honoured by a request to address a few words before this learned Society concerning the effect of the recent earthquake upon buildings. I do so with considerable diffidence. As a practical architect for many years engaged in teaching and practicing the art of architecture in this country, it is very difficult for me to treat such a subject in a popular and attractive manner, but I shall attempt to avoid as much as possible small and tedious technicalities.

[和訳] 諸君。最近の地震が建物に対して及ぼした影響について、私がいくつかのお話しをこの造詣深い協会において行えることは光榮の至りである。さて、私はこの話しを慎重に進めたいと考えている。それは、実務に通じた建築の専門家がこの国では建築芸術の教育と実践について長年関わっており、このように一般的で興味深い主題を扱うことは非常に難しいためであるが、私は詳細で退屈な専門事項はできる限り避けて話しを進めて行きたいと考えている。

挨拶としては型通りのもので、謙遜を込めてのものではなるが、基本的には一般人向けの演説であるため専門的で詳細な話題に偏ることがないよう話を進めたいとする。

2-3-2 日本におけるこれからの建築様式

ところが、これに続く話はコンドルが来日以来抱き続けた日本の風土にあった建築様式、つまり国民様式の呈示^{注23)}についての問い掛けである。

Though concerned chiefly with buildings of the modern style, no resident architect interested in the universal history of his art can avoid studying to some extent the ancient Japanese styles, especially those magnificent examples such as the Temples, Palaces, and Castles, bequeathed, regardless of expense, by former generations. Asking your indulgence in making one more personal explanation, I may add that my desire and intentions on first arriving in this country were to follow, in new buildings, as far as possible the character of the old architecture, and avoid losing the national type and style which already existed. Similar resolutions have been formed and subsequently relinquished

by other modern practitioners, both Japanese foreign; and the same ideas have been vehemently propounded by others, who, not being practitioners, have been unable to discover their chimerical character.

Why is it, then, that these first ideas and resolutions have all disappeared, and that modern architectures are engaged in erecting edifices almost completely in foreign style? It is because such theories as the above have proved impossible of practical realization.

[和訳] 最新の建築様式に第一に目が行きがちではあるが、建築意匠において広く歴史に興味を持つ日本の建築家は、先人達より遺された、特に寺院、宮殿、城郭などの費用を惜しまない壮麗な実例である古い日本建築の様式の応用を検討せずにはいられない。個人的には私がこの国に初めて訪れたときに抱いた、古い建築物の特徴でできるだけ残し、既に確立されたこの国の様式と形を失うことは避けたい、という願望と考えを付け加えておきたい。最近でも、似たような決意は内外の専門家によってなされたものの、いずれもその後、放棄されている。そして、同様の考えは専門家以外にも熱心に提起されましたものの、形として示すことはできなかった。それから、何故、最初の考えと決意のすべてが消滅したのか、そして、現代の建築が、完全なまでに洋風の建築物を建設することに終始するのは何故なのだろうか。それは、上で述べたような考え方が実際の形として造る場合は実現が難しいとわかったからである。

ところで、この現代の建築に過去の様式を取り入れる話題は、一般向けとしては極めて専門的で、震災直後の演説冒頭における演題としては疑問が残る。そのためコンドルもこの後段で、

Some people, again, have been of opinion, that, though there are no suitable models for modern buildings among those of the ancient style, it is nevertheless possible and desirable to adapt the ancient methods of construction and their artistic features of design to structures built on modern plans, in modern proportions, and suited for present requirements. This has been attempted in various ways, but has failed to produce satisfactory results, for reasons which it would take me too far outside the immediate subject of this address to explain.

[和訳] 現代の建物に対し適当な規範が古い建築からは見いだせないが、古い建築の形式を現代における規模で、計画によって築き、現在の求められる建築物に適応させることは可能で、望ましいと改めて言う一群の人々の意見がある。このようなことは様々な方法で試みられたものの、満足な結果を生むことはできなかった。但し、その理由は本日の演題からはやや離れるものとなるので、申し述べないこととする。

として深入りはしないとしている。しかし、コンドルが特にこの問題について演説の冒頭にわざわざ挙げたのは、コンドルが後段で述べる和風の公共建築において地震の被害が多数確認されたことへの伏線的な意味を持たせたものと見ることができる。

2-3-3 木造建築と地震

木造建築と地震についてコンドルは

- ・在来木造建築と地震の関係
- ・在来木造建築と洋風木造建築の比較

の2点を述べている。以下この2点について考察を加えたい。

・在来木造建築と地震の関係

日本の在来木造建築についてコンドルは維新後、耐火建築が増えたが、在来の木造建築について被災地の調査から得た成果はなかったとする。但し、一部の城郭、寺院建築が被害を免れたことは

It is not my intention to disguise the fact that certain purely Japanese buildings, such as the castle *Tenshu* and the *Hondou* of the largest temples, have shown by far the best record in the late convulsion, some of them remaining entirely uninjured; whereas certain European buildings in the same cities have been seriously damaged.

[和訳] 天守閣や大寺院の本堂など、特定の純和風建築が、先の震災において非常によく堪え、一部の純和風建築は全く無傷のままであった、一方で、同じ都市において、ある特定の洋風建築は、多大の損害を受けた事実を隠蔽することが私の意図ではない。

として認めるが、天守や寺院本堂が被害を免れた理由は、巨大な材自体が持つ強度と構造に起因する剛性によるものとしている。なお、在来の構法に利点があるとすれば

If, as has been speculated, the isolation of supports and the looseness of joints in the framed walls of Japanese buildings gave a seismic advantage, then the best result should have followed in the lighter class of buildings, where such looseness is unopposed, and not in the heavier ones where weight and mass both assist in counteracting such tendency to movement.

[和訳] 日本建築の軸組構法における土台の分離や柔接合の地震に対する利点を推測すれば、最大の結果が期待できるのは軽量の建物であること、また小規模の場合、軟構造が束縛を受けず、荷重と質量両方の運動の方向を打ち消す働きをする場合であらう。

とするように、建物が小規模な場合、運動が荷重、質量の運動を打ち消す場合としている。

・在来木造建築と洋風木造建築の比較

続いてコンドルは木造建築において在来の和風と洋風における被害の差について述べ、

Now, putting on one side these exceptional buildings, and considering only the ordinary wooden structures of Nagoya, Gifu, Ogaki, and neighbouring districts, the result of observation seems to show that the so-called European wooden buildings have stood better during the earthquake than those of purely Japanese construction, and this notwithstanding the fact that the former are generally higher than the latter.

[和訳] いま、これらの特別な建物を除外して、名古屋、岐阜、大垣とその周辺における一般的な木造建築を概観すると、調査の結果では地震に対して、いわゆる洋風の木造建築の方が、純粹な和風建築より被害が少ない。また、このような事実にもか

かわらず一般に洋風建築は和風建築より階高が高い。
洋風木造建築の方が被害の少ないことを指摘している。その理由としてコンドルは、

The reason for this appears to be the superior stiffness of the framework of European wooden structures, occasioned by a stronger method of jointing, the frequent introduction of intermediate uprights, the use of continuous plates below, tying together the feet of the posts, and, above all, the use of diagonals.

[和訳] この理由は、強固な接合法、柱間に多用される間柱、下部における連続した壁板の使用、柱の足元における緊結、そして特に筋違の使用によりもたらされる木造洋風建築の構造における優れた剛性にある。

として、在来の和風建築において筋違などの利用の見られぬ点をあげ、後段ではこれらの使用を助言している。

2-3-4 煉瓦造・石造建築と地震

煉瓦造と石造の内、特に煉瓦造を中心に、その被害の原因についてコンドルは述べている。まず、煉瓦造では上層階の被害が認められることから、演説において

Now, if we were satisfied that the brick buildings of Nagoya were constructed in their upper portions as brick buildings ought to be, and as well as science and reasonable expenditure could make them, the conclusion to be drawn from this would be that it were better in the future to limit brick structures to one storey buildings.

[和訳] 現時点で、我々が名古屋における煉瓦造建築の上部も煉瓦造建築としてしかるべき姿で建設され、同時に科学と適正な費用でそれが達成したと確信するならば、以上から導かれる結論は、将来、煉瓦造は1階建ての建物に制限するのがよい、ということである。

と、将来は平屋の煉瓦造に制限すべきとまで言い切っているが、演説では続けて

But all of the experts, and they are many, who have examined these damaged buildings, are agreed that their construction, and especially the construction of the their upper portions, were seriously defective, regarded merely according to the ordinary laws and rules of building for similar structures.
[和訳] しかし、全ての専門家と被災した建物を調査した多くの人々は、これらの施工と特に上階における施工における深刻な欠陥を認めるとともに、類似した構造の建築に対しては単に一般の法律と規則の遵守を考えている。

として、今回の被害の原因として施工不良を挙げ、対策として規制の徹底を示す。そのため、今後の煉瓦造建設に関しては

Taking into consideration the above observations I do not think we can conclude that brick buildings are specially dangerous in earthquake countries, but we can certainly conclude that improperly and cheaply constructed brick buildings are dangerous. The fault in improperly constructed brick buildings lies partly in the general design, -the proportioning of areas, weights, heights, and

thicknesses, but to a great extent also in the execution of the work.

[和訳] 以上の点を考慮すると、煉瓦造建築が特に地震の多い国において危険であるとするのではなく、不適切にそして安価に施工がなされた煉瓦造建築が危険であると疑いなく結論付けることができるのである。区画、重量、高さ壁厚の釣り合いや施工の実施についても、不適切に建築された煉瓦造建築の欠陥が一般的なデザインの中にも散見される。

とあるように、適切な施工と設計の必要性を説き、併せて

Besides this, special methods of bond, the application of iron ties, and other improvements in general construction have been often introduced. The late terrible earthquake proves the necessity for such precautions, and also provides many lessons for further improvement.

[和訳] これらの他に、接合に関する特別の方法、鉄製の結束具や一般的な建築工法における他の改善策はしばしば提案されてきた。今回の甚大な地震はこのような予防措置の必要を証明し、加えて、更なる改善のための多くの教訓を提供している。

としている。

2-3-5 耐火建築について

続いて、今回の地震において笠松、岐阜、大垣などでは地震に続いて発生した火災によって多くの罹災者が生きながら焼け死んだ点にコンドルは触れ

If we could eliminate the element of fire from such catastrophies the destruction and ruin would be greatly reduced.

[和訳] そのような大惨事から火事の要因を除くことができるならば、破壊と破滅は大いに低減されるであろう。

として、火災の軽減も強く訴えている。なお、これに続くコンドルの言葉は、日本の大工仕事をよく見つめたものとなっている。

The Japanese carpenter is himself a kind of architect, acquainted, so far as his lights go, with the properties of the material he works with; the bricklayer, on the other hand, is an ignorant drudge whose one idea is to work against time and shirk where possible the directions of his overseers. The one has his soul in the work, the other is like a heartless task-man.

[和訳] 日本の大工は一種の建築家で、その特性と材料に関しては精通している。他方、レンガ職人は、時間と管理者の命令から出来る限り逃げようとする無知な労働者に過ぎない。一方は、仕事に魂が込められ者で、他方は無情な義務を果たす者でしかない。

2-3-6 さいごに

コンドルはこの演説のまとめで、

It is specially the duty of all scientific men to devote their talents and knowledge to this subject

[和訳] この問題に才能と知識を捧げることは科学に携わるものにとっての責務である。

として、偏見を排してこの問題に関わるべきとして、更に科学者と技術者に対し、

There is no reason why these two classes should not work with perfect unity and accord towards the common goal.

[和訳] この2者(2種類の科学者)が共通の目標に向かって、完全に一体となり調和し協力し合うべきである。

と訴え、演説をまとめている。

2-4 J・コンドルによる能弁学会演説の意味

コンドルは、後日行われた造家学会の演説において、能弁学会における演説を以下のように要約している。

昨年十月起リマシタ地震ガ各種ノ建物ニ見ハシタル結果ニ就キマシテハ前回私ガ能弁学会デ演説イタシマシタ時分ニハ唯其或ル部分ニ付テ述ベマシタ、其演説ノ理屈ト云ヒマスモノハ此震災後人心ガ恟々トシテ居ツタガ為メニ世人ガ只目先キノ事許リニ聯結シテドモモ精シク其原因ニ立入ツテ調べタル云フ感覚ガ自然薄クナツテ居テサウ悪ク言ハヌデモ宜イ様ナモノデモ無闇ニ之ヲイケヌト云ヒ且徒ラニ旧風ヲ挽回セントスル様ナ傾キガ大変アリ其着目ヲ誤ツタ様デシタカラ夫レガ理由デアツテドウカ廣ク公衆ニ注意ヲ与ヘタイト思ツテ其演説ヲイタシタ訳デアリマス

偕其世人一般ノ考ト云ヒマスルモノハ何カト云エバ煉瓦ヤ石ノ建物ト云フモノハイケヌト云フ事ニナツタ、夫レハナゼカト云フニ本當ノ構造法ニナツテ居ラヌ所ノ極ク安普請ノ煉瓦石造ノ家ナドガ毀ハレタ為メデアリマス

これによれば、能弁学会における演説当時は、世間では目先の被害ばかりに目が行き、被害の原因にまで深く立ち入った調査がなされず、非難される必要のない煉瓦造が批判に晒され、在来の和風建築を尊重するような傾向が強くなり、その点は誤りであることを伝えたいと考え演説を行ったとする。そして、一般の考えでは石造や煉瓦造の否定ということになったが、それは本格的な構造を備えず、予算不足の建築が倒潰したためであったとした。

なお、一般には濃尾地震後、煉瓦造を中心とする建物への疑問が広まったとするが、実際のところ煉瓦造に対しこのような現象は早くも濃尾地震発生2日後となる10月30日付『時事新報』に

○煉瓦の建物に倒れたるもの多し 大坂諸工場を始め各地電信局停車場の建物中煉瓦にて建築せるものは今回の地震の為に倒仆したるより考ふるに概して日本建物より煉瓦建築の方破損多かりしと云ふ^{注24)}

とあり、続く31日付『郵便報知』にも

●木造と石造との被害度合 石造家屋は今回の大地震の為に痛く損害を蒙りたり左れと木造家屋は割合に被害の度甚しからず石造木造の利害は今後倍す問題とならん^{注25)}

とあるように石造に対する疑問が掲載されている点からも明らかである。即ち、このような風潮に対する考えがコンドルの能弁学会における演説であったと言える。

コンドルは能弁学会における演説冒頭で自身の日本における様式建築導入の葛藤を記すが、これとは全く別に濃尾地震により発生した煉瓦造、石造建築における被害の多発に端を発する両建築の排斥と、木造建築に対する現状の被害を的確に省みない中での肯定を憂いている。そして一連の調査結果から、被災した煉瓦造に対しては施工不良、予算不足を指摘し、煉瓦造の耐火に対する長所を強く説いたと言える。

3. 造家学会における演説について

3-1 J・コンドルによる造家学会演説の日時と場所

コンドルによる濃尾地震被災地調査後における造家学会での演説は、前述のように明治25(1892)年1月27日18時より、地学協会の会堂において造家学会の通常会として、中浜西次郎とコンドルにより実施され、散会は22時30分、参加者は202名とする^{注26)}。

3-2 J・コンドルによる造家学会演説の原稿

コンドルによる演説と文速記は『建築雑誌』63～65号に掲載される。ところで従来、この英文原稿の存在は明らかではなかったが、この演説の英文原稿と考えられるものが、JWM紙の明治25(1892)年1月30日号^{注27)}に見ることができる。内容は既に示した通りで、全体として英文と和文はよく対応し、コンドルの演説について訳文に原則、省略は見られない。但し、演説後の質疑応答部分がJWM紙には所収されず『建築雑誌』にのみ記され、『建築雑誌』に掲載される図版もJWM紙には掲載されない^{注28)}。

さて、コンドルによるJWM紙における記事冒頭を見ると

EARTHQUAKE VERSUS BUILDINGS.

BY JOSIAH CONDER, F. R. I. B. A.,

READ BEFORE THE SOCIETY OF JAPANESE ARCHITECTS,

JANUARY 27TH, 1892.^{注29)}

[和訳]地震対建物

英国王立建築家協会正会員 J・コンドル教授による

造家学会における演説 1892年1月27日

とある。1行目が演説題名で、3行目冒頭が能弁学会の原稿と同様に“READ”から始まるため、本原稿が造家学会における演説のためコンドルが準備した英文原稿原文と判断できる。

3-3 J・コンドルによる造家学会演説の題名

ところで、演説の題名を各資料間で比較すると以下のような差異が確認される。JWM紙の明治25(1892)年1月30日号で題名は

EARTHQUAKE VERSUS BUILDINGS.

[和訳]地震対建物……………①

とするが、『建築雑誌』の本次会议では

諸種建物ニ関シ近頃ノ地震ノ結果^{注30)}……………②

とし、演説の和文速記での題名は

各種建物ニ関シ近頃ノ地震ノ結果^{注31)}……………③

となる。②、③は類似した内容であるが、これは前掲した能弁学会における英文題名である

THE EFFECTS OF THE RECENT EARTHQUAKE UPON BUILDINGS.

の和訳であることに気付く。つまり造家学会の演説にコンドルが本来考えた題名は“地震対建物”と考える必要がある。

題名にこのような差異の発生した理由は明らかでないが、前述した明治44(1911)年の建築学会におけるコンドルによる“公共建築に関する私見”と題された演説も、

もと「演題未定」と掲げられしを辰野博士の意見によりて上記の如く題したり^{注32)}

と、通訳した高松が追記している。

つまり、明治25(1892)年における造家学会の演説を伝える記事では、本来の英文題名に対し直近の能弁学会における演説題名の和訳を、『建築雑誌』編集の段階で改めた可能性を指摘できる。

4. さいごに

コンドルによる濃尾地震被災地調査後における能弁学会、造家学会における演説について考察を加えたが、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) コンドルによる能弁学会によるとされる演説は明治24(1891)年12月6日、神田錦輝館において実施され、英文原稿はJWM紙の明治24(1891)年12月12日号に掲載された。
- 2) 能弁学会における演説でコンドルは、被災地の煉瓦造建築における被災による煉瓦造建築の排斥と、木造建築に対する現状を的確に省みない中での肯定を憂い、調査結果から被災した煉瓦造については施工不良、予算不足を指摘し、煉瓦造の耐火に対する長所を強く説いた。
- 3) コンドルは翌明治25(1892)年1月27日、地学協会会堂にて造家学会の演説を行い、英文原稿がJWM紙の明治25(1892)年1月30日号、訳文が造形学会の『建築雑誌』63～65号に掲載された。
- 4) コンドルによる造家学会演説の英文原題は JWM 紙によれば“EARTHQUAKE VERSUS BUILDINGS.”([和訳]地震対建物)であった。

このようにコンドルは濃尾地震後、少なくとも2度の演説を行ったことが明らかとなった。特に今回、原稿を紹介した明治24(1891)年12月6日の演説は、濃尾地震後に名古屋、岐阜、根尾谷、大垣そして大阪におけるコンドル自身の調査結果を踏まえたもので、濃尾地震における煉瓦造建築の被害の原因について、施工不良、予算不足と的確な理由を挙げている点が注目される。

また、この演説が一般向けであるにもかかわらず、演説前段でコンドルがいわゆる“国民様式の呈示”について言及した点は興味深い。来日以来、終生、この問題を追及し続けたコンドルであるが、濃尾地震直後の演説でも特にこの点に論及したのは、地震後に見られた煉瓦造、石造建築の被災による両建築の排斥と、在来の木造建築に対する現状の被害を的確に省みない中での肯定を憂いたもので、その考えは翌明治25(1892)年1月27日、造家学会の演説におけるコンドルによる“徒ラニ旧風ヲ挽回セントスル様ナ傾キガ大変アリ其着目ヲ誤ツタ様デシタ”との言葉に集約していると言える。

本研究は2015(平成27)年度 鹿島学術財団研究助成「J・コンドルによる濃尾地震調査とその後の影響」(代表：平山育男)による成果の一部である。

参考文献

- 1) J. Conder: AN ARCHITECT'S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.、Seismological journal of Japan18、pp.1～91、1893.12
- 2) 造家学会：本会記事、建築雑誌62、p.33、1892.2
- 3) J. Conder: THE EFFECTS OF THE RECENT EARTH-QUAKE UPON BUILDINGS.、The Japan Weekly Mail.、1891.12/12、pp.725～726
- 4) ①ゼー、コンドル:各種建築ニ関シ近來ノ地震ノ結果、建築雑誌63、pp.63～67、1892.3
②ゼー、コンドル:各種建築ニ関シ近來ノ地震ノ結果(承前)、建築雑誌64、pp.92～99、1892.4
③ゼー、コンドル:各種建築ニ関シ近來ノ地震ノ結果(承前)、建築雑誌65、pp.132～137、1892.5
- 5) J. Conder: EARTHQUAKE VERSUS BUILDINGS.、The Japan Weekly Mail.、1895.1/30、pp.153～155
- 6) 平山：J・コンドルによる濃尾地震後における造家学会演説の英文原稿について、長岡造形大学紀要12、pp.79～94、2015.4

7) ジョサイア、コンドル

- ル：公共建築に関する私見、建築雑誌289、pp.15～17、1911.1
8) 高松政雄：通訳 公共建築に関する私見、建築雑誌289、pp.17～21、1911.1

注

- 注1) 平山：J・コンドルによる濃尾地震の調査地から横浜の欧字新聞社への投稿について、日本建築学会計画系論文報告集717、2645～2652頁、平成27(2015).11
注2) 参考文献1)
注3) 平山：J・コンドルによる濃尾地震被災地の調査地と日程について、日本建築学会計画系論文報告集719、187～194頁、平成28(2016).1
注4) 平山：J・コンドルが濃尾地震被災地の調査において残した写生(スケッチ)について、日本建築学会計画系論文報告集724、平成28(2016).6
注5) 参考文献2)
注6) 『建築雑誌』や後掲する新聞紙上でも“演説”とあるためこの語を用いる。
注7) 参考文献4)①63頁
注8) 後述のように、日本側に資料ではこの演説会が能弁学会によるものとの記載は一切見られないが、本稿ではコンドルによる記録を尊重し、能弁学会による演説会と表記する。
注9) 参考文献3)725頁。以後、コンドルによる演説の引用はいずれも参考文献3)に挙げるJWM紙からのもので、注は略する。
注10) 日就社：読売新聞、明治24(1891).12/3、3頁
注11) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、明治24(1891).12/4、2頁
注12) 時事新報社：時事新報、明治24(1891).12/5、1頁
注13) 日就社：読売新聞、明治24(1891).12/5、4頁
注14) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、明治24(1891).12/5、6頁及び12/6、6頁
注15) 時事新報社：時事新報、明治24(1891).12/5、8頁及び12/6、10頁
注16) 時事新報社：時事新報、明治24(1891).12/9、2頁
注17) 時事新報社：時事新報、明治24(1891).10/11、3頁
注18) 日就社：読売新聞、明治24(1891).9/16、3頁
注19) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、明治24(1891).10/21、1頁
注20) 参考文献7)
注21) 参考文献7)、17頁
注22) 参考文献8)
注23) 菊池重郎：明治建築案内、177頁、昭和42(1967).7
注24) 時事新報社：時事新報、明治24(1891).10/30、4頁
注25) 報知社：郵便報知、明治24(1891).10/31、2頁
注26) 参考文献2)。なお、造家学会：建築雑誌62、33頁、明治25(1892).2、における造家学会の“本会記事”において、明治25(1892)年1月27日の通常会において行われた“講演”の語を用いるが、参考文献4)に挙げた文献ではいずれも“演説”とするため、本稿でも“演説”の語を採用する。
注27) 参考文献5)
注28) 参考文献6)
注29) 参考文献5)153頁。以後、コンドルによる演説の引用はいずれも参考文献5)に挙げるJWM紙からのもので、注は略する。
注30) 参考文献2)
注31) 参考文献4)
注32) 参考文献8)

STUDY ON THE SPEECH BY J. CONDER AFTER THE NOBI EARTHQUAKE INVESTIGATION

Ikuo HIRAYAMA *

* Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

Until now, I showed that J. Conder proceeded to the stricken area of the Nobi earthquake generated on October 28, 1891, he contributed the reports to The Japan Weekly Mail from the field, and these reports were placed in that magazine by the name of signatory X.. In addition, I clarified the investigation place and the schedule in the Nobi earthquake stricken area of J. Conder from this contribution and analysis of “AN ARCHITECT’S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.” wrote down by Conder.

Then, in this paper, I considered the speeches performed by J. Conder after the Nobi earthquake stricken area investigation, and it’s following points to become clear.

The speech in the Tokyo Nouben-gakkai (Tokyo Elocutionary Society) of J. Conder, the details were not clear conventionally only by a summary being spoken in the speech beginning of the Society of Japanese Architects.

The speech meeting in the Tokyo Nouben-gakkai by Conder was carried out at Kinki-kan on December 6, 1891, and the English manuscript wrote down by Conder was placed in the December 12, 1891 of the Japan Weekly Mail. Conder worried the following points by the speech in the eloquence society. They were rejection of the brick buildings by what a lot of brick buildings having received destruction at a stricken area, and affirmation not to reflect on the present conditions for the wooden building precisely.

Conder performed the speech of the Society of Japanese Architects on January 27, 1892, and the English manuscript was placed in the January 30, 1892 of the Japan Weekly Mail., and the English original title was EARTHQUAKE VERSUS BUILDINGS.

(2016 年 4 月 10 日原稿受理, 2016 年 8 月 9 日採用決定)